

# 恵まれた自然環境を未来へ スキーを通して気づいた自然観

編集者

尾日向 梨沙



## 雪国に移住し感じた自然環境の変化

雪国の暮らしに憧れ、2020年に神奈川県から長野県飯山市に移住し4年。自然に囲まれた暮らしは思った以上に豊かで、こんなにも心身を浄化するものなのだと、すっかり雪国生活者らしくなった今もなお、日常の風景の美しさに都度感動しています。

飯山の特徴を表すときに「四季の移り変わりがはっきりしている」という言葉をよく耳にします。真冬は一晚で50cm雪が積もることは普通で、連日の除雪作業とパウダースノー滑走を満喫。雪解け水があちこちで轟々流れ始めると春の野花や新芽が一斉に顔を出し、山菜やアスパラは食べ放題。田んぼに水が張る頃、カエルの大合唱が始まり、山の緑は日に日に濃く、農家さんは忙しそうに動き回る。お盆を過ぎれば暑さも和らぎ、稲穂が黄金色に輝く頃、トンボが飛び回り、辺りの森は色彩を帯びていく。木々が葉を落とし、大根や白菜のおすそ分けが玄関先に置かれる頃、「山の上に3回雪が降れば里にも積もる」という地域の言い伝えは大体その通りに、一面雪に覆われる季節がやってくる。

ところが何十年、何百年と当たり前に繰り返されているこのサイクルも、ここ数年の気候変動で、様々な変化が起きています。隣に暮らす90歳の女性も「こんなに雪が少ないのは初めてだ」「この時期にこれだけ暑いのは経験したことない」と畑の作物への影響とともに漏らします。

2023-2024年の冬は顕著で、私の住む地域では例年であれば毎日降雪があってもおかしくない年末年始の2週間、全く雪が降らなかつたり、3月に大雪が続いたり、4月に30度近い高温になったりと、体験したことのないことばかりでした。スキー場運営の皆様は大変なご苦労があったことと思います。

国内外さまざまなスノーリゾートや、雪国生活者への取材を続ける中で、この10年は特に自然環境についてお話を伺うことも多く、自分自身の暮らしも自然にできるだけ負荷をかけない選択を意識するようになりました。各方面で加速しているサステイナブルな取り組みの事例と、個人的に心がけていること、その想いをお伝えしたいと思います。

## 国内外で加速する サステナブルな 取り組み

2016年、オーストリア・レヒ村を訪れた際、スノーリゾートのホテルや商業施設は、村内に建つ木質バイオマス発熱所から温水が供給されており、ゴンドラやリフトは水力発電で稼働、スイスのいくつかのスノーリゾートでも水力発電を中心に再生可能エネルギーへの切り替えが急速に進んでいました。これらの取り組みの多くは1990年代から議論が進んでいたと言います。北米のリゾートでも同様に、90年代の終わり頃からサステナビリティへの取り組みが始まり、現在ではほとんどのリゾートに、サステナビリティ部門があるそうです。また、ヨーロッパのリゾートでは、現在、飛行機での移動がいかにCO<sub>2</sub>排出の多くを占めるかという部分が大きな論点となり、インバウンドに注力する日本とは逆に、海外からのツーリズム自体を見直すというリゾートも出てきています。

国内でもここ数年間で、索道やスキー場内施設の電力を再生可能エネルギーに切り替えるなど、自然環境へ配慮するスキー場が増えてきました。

気候変動から冬を守る環境団体Protect Our Winters Japan（以下POW）では、2023年に「サステナブル・リゾート・アライアンス」を立ち上げました。これは、脱炭素化を目指すスノーリゾートと、その利用者たちが一緒にサステナブル化に取り組むためのネットワークで、現在全国23箇所のスノーリゾートが加盟しています(2024年5月現在)。



サステナブル・リゾート・アライアンスに加盟している  
野沢温泉スキー場

具体的には、気候変動や企業の脱炭素化に関する専門知識をもつアドバイザーチームの協力を得て、先進事例の紹介やセミナーなどの実施、日本のスノーリゾートに向けてサステイナブルな取り組みをまとめたガイドラインの策定などを通して、スノーリゾートの脱炭素化をサポート。また、一般スキーヤー、スノーボーダーに向けて、サステイナブル化に取り組むスノーリゾートの積極的な利用を促したり、リフト券代の一部をサステイナブルな取り組みに使うための資金として寄付する仕組みを構築するなど、企業と個人の橋渡しの役割も担っています。

かつて日本では多くの森林伐採や、土壌の造成など環境破壊を繰り返し、スキー場開発が進みました。その時に失われた自然はもう取り戻せないかもしれませんが、スキー場が存在するおかげで、私たちは自然を身近に感じることができます。スキーやスノーボードを履いていなければ、会うこともなかった景色、感じることもできなかった雪や森の匂い。その自然体験は時に人生を変えてしまうほど、人々の心を潤します。スキー場はその空間を万人に開放しているエネルギーに満ちた場所だと思います。これからの時代は、より自然のことを感じ、守り、未来へと繋げる発信基地であってほしいと考えています。



飯山の自宅では「太陽光生活研究所」として雪国での太陽光発電の実証実験を行っている

## ひとりひとりの 意識改革から 豊かな自然を 未来へつなぐ

スキー場の取り組みはもとより、ひとりひとりの意識改革が最も大切なことだと個人的には思っています。いくら会社でサステイナブルな取り組みを進めていても、個人の意識が伴っていなければ本質的な改革にはならないのではないのでしょうか。

とは言え、田舎暮らしでは車のない生活は考えられないし、お肉や乳製品の生産過程に置ける環境負荷が高いとあって、すぐに食生活を切り替えることは容易なことではありません。私個人としては、自分で切り替えられる部分をひとつずつ、楽しみながら、意識するようにしています。ほんの一例ですが、マイボトルやマイ箸などは当たり前のこととし、自転車や公共交通機関で移動できるところは車を使わない、環境汚染を引き起こす洗剤や労働者の人権が守られずに製造される大量生産の洋服は買わない、プラスチック製品ではなく自然素材の製品を選ぶ、再生可能エネルギーへの切り替え、太陽光発電の導入、食材は畑でできるだけ自給、除草剤や農薬は使わない、生ゴミはコンポスト、サステイナブルな取り組みをしている企業を応援する、などなど。自分ひとりが変えたって変わらないと思われるかもしれませんが、こういった取り組みで、地球温暖化を食い止めよう！という志よりも、長い年月スキーを通して、素晴らしい自然体験をさせてもらった、その自然へのありがとう、これからもよろしくねって気持ち、それだけなんです。



最寄の戸狩温泉スキー場では雪不足により  
ハイシーズンに雪入れ作業が繰り返された

## 最後に

---

家の周りを飛び回る小さな鳥や虫、土中に生きる無数の微生物、熊や鹿、キツネなどの野生動物が自分の暮らすテリトリーに共存する環境で、樹木、植物とともに、それぞれが役割を担い、生態系を育んでいます。人間だけが、人間の都合や欲で、乱開発をしたり、知らぬ間に環境汚染を引き起こしているという事実を見つめ、少しでも自然に優しい選択ができれば、というシンプルな思いがあります。

東京に暮らしていた頃は、そんなことは考えもしませんでした。「エコ」は意識したとしても、どこか他人事でした。毎日のようにスキーをすることで日本の豊かな自然を感じ、さらに移住をして昔ながらの里山の暮らしを知ったことから、自然の捉え方も徐々に変化してきました。

世界的にも稀な「雪」に恵まれた日本。天然雪でスキーやスノーボードを楽しむことができる環境を少しでも守るために、ひとりでも多くの方々が、自然に寄り添った意識へと切り替え、自然の恩恵を大切に生かし、未来へと繋げられますように願うばかりです。

尾日向 梨沙 / OBINATA Lisa

編集者

---

1980年、東京都生まれ。

早稲田大学第二文学部卒業後、13年間、スキー専門誌『Ski』『POWDER SKI』（実業之日本社）などの編集を担当。2013年より同雑誌の編集長を務める。

2015年、フリーランスとなりスノーカルチャー誌『Stuben Magazine』を写真家・渡辺洋一氏と共に創刊。2019年には神奈川県藤沢市の自宅を国登録有形文化財『松の杜くげぬま』とし、歴史的建造物と周辺の緑を守る活動を開始。現在は信州を拠点に、自然に寄り添った暮らしを目指しながら『Stuben Magazine』の製作やフリーランスライターとして活動中